

# 『松浦宮物語』論

## — 卷一、卷二加筆の可能性をめぐって —

小南 浩美

### 序

『松浦宮物語』は全三巻から成る中世擬古物語の一つであり、その内容は実にバラエティに富んだ性格を持っている。しかし、この物語の研究において、一番の論点となってきたのは、その成立、及び作者についての問題である。現在、この物語を藤原定家の少将時代あるいはそれ以前の作品とする見方が最も有力であるが、それは今一步定説に至らず、また、巻<sup>社</sup>二、三が後代の加筆ではないかと言う意見も有る。

そこで、卒論においては、定家作者説の再検討と物語の文体分析という二方向から、『松浦宮物語』の作者ないし成立を考えた訳であるが、ここでは、第一章第二節『無名草子』の記述をめぐって、第二章第二節文体的分析を中心に再構成し扱ふこととする。

なおテキストには、角川文庫『松浦宮物語』（萩谷朴訳注）を用いた。

### 本論

#### 第一章 定家作者説の再考

『松浦宮物語』の作者について言及している同時代的資料は、次にあげる『無名草子』の記述のみである。

「またむげにこの頃出で来るものあまた見えしこそ、なかなか古きものよりは詞づかひありさまなど、いみぢげなるも侍るめれど、なほ『狭衣』、『濱松』ばかりなるこそ、え見侍らね。又たかのぶの作りたるのとて、うきなみとかやこそ、ことの外に心にいれて作りける程見えて哀れに侍れど、そもなか詞づかひなどてづゝけにいていとゆきて覚えはんべらず。又定家少将の作りたるとてあまはんべるめるは、ましてたゞけしきばかりにて、むげにまことなきものどもに侍るなるべし。まつらの宮とかやこそ、ひとへに萬葉集の風情にて、宇津保など見る心地して愚なる心も及ばぬやうに侍るめれ。」

『無名草子』の作者が、定家の近親者たる俊成女である

＜ 表 一 ＞

|     | 収歌数  | 万葉集に本歌・類歌のあるもの (%) |
|-----|------|--------------------|
| 巻 1 | 34 首 | 13 首 (38 %)        |
| 巻 2 | 17 首 | 0 首 ( 0 %)         |
| 巻 3 | 20 首 | 3 首 (16 %)         |
| 全 体 | 71 首 | 16 首 (23 %)        |

事などから、この記述はかなりの信憑性を持って受けとめられており、多くの定家作者説は、これを元に『松浦宮物語』の作者を定家と仮定した上で、さらにそれを肯定化して行くと言う方法をとっている。したがって、定家作者説の妥当性を知る為にはこの記述の信頼性を謀る必要が有る。そこで、この記述は『万葉集』及び『宇津保物語』との類似性をもって『松浦宮物語』を批評しているが、それが正しいか否かを調べてみた。

まず、『万葉集』との類似性であるが『松浦宮物語』に収められている和歌で『万葉集』に本歌、類歌を持つものは表一の様になる。(なお『松浦宮物語』の和歌に関しては、その本歌、類歌の時代別一覧表が、萩谷朴氏によって作られており、表一の作成にあたってこれを利用した。)

この表から解る様に、確かに巻一においては『万葉集』と『松浦宮物語』の類似性は高いと言えるが、巻二、三においては認め難い。また、全体でも『万葉集』と類似性を持つ和歌は僅か二三%である。

次に、『宇津保物語』と『松浦宮物語』の類似性であるが、それは主に、琴の秘曲伝授物語としての共通性であり、設定・構想をはじめ、文章的、表現的にもかかなり高い類似性を認めることが出来る。しかし、その共通点のほとんどが巻一に集中している事は注目に値する。そもそも『松浦宮物語』における琴曲秘伝のプロットは、巻一に相当する部分であり、巻二、三となると巻一とはかなり構想を異にしている。つまり、『松浦宮物語』において「琴の秘曲伝授物語」とは、巻一そのものを指すのであり、したがって『宇津保物語』との類似性は、巻一のみに認められるべきものである。

以上の事から『無名草子』の評価にふさわしい『松浦宮物語』は巻一であり、俊成女の言う『松浦宮物語』は、現存するその巻一、もしくは巻一を含む『原・松浦宮物語』とも言えるものであると考えられる。いずれにせよ、これによって定家作者説が肯定し得るものを巻一のみにとどめ、逆に巻二、三加筆の可能性を高めることとなった。

## 第二章 文体的分析

『無名草子』の記述を調べる事によって得られた巻二、三加筆の可能性を『松浦宮物語』の文体的な分析によって

< 表二 >

|    | 卷 一       | 卷 二       | 卷 三        |
|----|-----------|-----------|------------|
| なむ | 14 (2.8%) | 4 (0.5%)  | 3 (0.7%)   |
| ぞ  | 16 (3.2%) | 28 (4.0%) | 42 (10.5%) |
| 行数 | 487       | 686       | 397        |

※ 行数は各巻の和歌を除く  
%は行数に占める割合

確かめてみた。その方法としては、辛嶋稔子さんの<sup>注三</sup>『伊勢物語の三元的成立の論』を参考とし、次の四点において『松浦宮物語』を分析した。

- (四)(三)(二)(一)  
係助詞「ぞ」「なむ」の用法  
指示代名詞の用法  
和歌の用法  
形容詞のウ音便化現象

1. 係助詞「ぞ」「なむ」の用法

『松浦宮物語』における「ぞ」「なむ」の使用数を各巻ごとに表示してみると、表二の様になる。ちなみに、各巻

の散文的分量をその行数によって示している。この表から解るように、巻一においては「ぞ」「なむ」の使用数がほぼ同数であるのに、巻二、三においては、圧倒的に「ぞ」の使用が多い。

一般に言われる「ぞ」「なむ」の違いであるが、ともに主に強意の手段として用いられるものの、「ぞ」は「なむ」より語気が強い。つまり、「なむ」の方が強意の表わし方がやわらかで、話しかける気持ちで用いられたと考えられている。さらに辛嶋さんは、『源氏物語』のような物語では「なむ」の使用が多く、史実を説明していく歴史物語である『栄華物語』では「ぞ」の使用が多いという調査結果から、「ぞ」を多く用いた文章の方が作る意識より付け加えてゆく意識が強く、話すより説明する気持ちが強いのではないかと考察されている。この説に従えば『松浦宮物語』は、巻一よりも巻二、三の方がより説明的に、強い調子で書かれているという事となる。

しかし、ここで注意すべき事は、「ぞ」は中世に入ってから盛んに用いられたが、「なむ」は平安時代に栄えたのみで次第に衰え、鎌倉時代に入ってから用例が僅かとなっている点である。『松浦宮物語』が、少くとも平安末期から鎌倉初期の作品である事は、これまでの研究によっても明らかである。したがって、巻二、三における「なむ」減少、及び「ぞ」の増加は、巻二、三に執筆時の言語現象としての「なむ」の減少そのものが、反映した結果ともとれる。すると『松浦宮物語』は、巻一が「なむ」の減少が

頭著に現れる前、比較的早い時期に成立し、巻二、三はその後の加筆であるとも考えられる。あるいは、巻一と巻二、三の作者が別人であり、二人の作者の文体的特徴として、「ぞ」「なむ」の使用率に差が生まれたものとも考えられる。

さらに、もう一つ考えられる事が有る。『松浦宮物語』は、いわゆる古物語を偽装した作品であり、当初は、物語そのものの成立を藤原京時代以前に見せかけようとする意図がはっきりしていた。しかし、その古物語の偽装は巻一半ばから崩れ始め、巻二、三に至っては、擬古的意図がかなり薄れてくる。したがって、この「なむ」の減少、及び「ぞ」の増加は、文体上における擬古的意識の崩れを現わしているともとれる。

しかし、文章を古めかしく見せる為に、ことさら作者が「ぞ」「なむ」を使い分けたと考えるのには多少無理がある。そもそも、『松浦宮物語』において、巻一前半に見られる様な徹底した擬古意識は、確かに巻が下るに従って薄れてはゆくものの、巻三の省筆や偽跋によって、あくまでも古物語の姿勢を保とうとしている。それならば、文体的に古めかせる為に、意識的に「ぞ」「なむ」を使い分けているのだとしたら、それを崩す必要はどこにも無かったわけである。また、この物語における古物語偽装の崩壊の最も大きな根拠となっているのは、物語に収められた和歌において、当初に見られた万葉振りが、巻一半ばより崩壊し始めている点であるが、まして、この和歌振りの変容に

合わせて、文体の古めかしさを取り払う為に、「なむ」の使用を減らしたと考えるのは、これこそ無理であろう。ゆえに「なむ」の減少、「ぞ」の増加を物語の擬古意識と関係づけて考える必要はない。

以上の様に表二は解釈できるが、いずれにせよ、これによって巻一と巻二、三の間に文体的相違を認めることができ、巻二、三加筆の可能性を強めている。

## 2. 指示代名詞の用法

近称の代名詞コ、コレ、ココをコレ系、中称の代名詞ソ、ソレ、ソコをソレ系とすると辛嶋さんは、この二つについて次の様に述べられている。

「<sup>注四</sup>大体コレ系とソレ系の代名詞は、物語の中ではどちらを使っても、意味上にたいした違いはない場合が多い。(中略)その使用度数の相違は、作者の癖、または文体的な相違と見られる。」

『松浦宮物語』においても、この事はあてはまる様である。例えば、

「いはけなくてこの山に物忌し給ひける秋の月の夜、仙人くだりてこの琴ををしへけるによりて、八月九日のつきのさかりには、かならずかの山にこもりて、このねをならしたまふ。」(巻一)

において、「この山」は「その山」、「この琴」は「その琴」、「このね」は「そのね」でも意味は通じる。

そこで『松浦宮物語』におけるコレ系、ソレ系の代名詞

< 表 三 >

|       | 卷 一      | 卷 二      | 卷 三      |
|-------|----------|----------|----------|
| こ     | 30       | 19       | 14       |
| こ れ   | 4        | 7        | 3        |
| こ こ   | 0        | 0        | 0        |
| コレ系合計 | 34 (94%) | 26 (70%) | 17 (77%) |
| そ     | 2        | 11       | 3        |
| そ れ   | 0        | 0        | 2        |
| そ こ   | 0        | 0        | 0        |
| ソレ系合計 | 2 (6%)   | 11 (30%) | 5 (23%)  |

※ %は各巻におけるコレ系、ソレ系の代名詞が占める割合を相対的に見たもの

の使用度数を調べてみると、表三の様になった。(なお、この調査は会話文と和歌を除いた地の文のみを対象とした。)これから解る様に、巻一では圧倒的にコレ系代名詞の使用が多く、巻二、三ではソレ系代名詞の使用度数が増えている。

一般に、コレ系の代名詞は、話し手、書き手が、それを「自分を中心とする円周内に含まれるもの」と考えて表現する場合に用いるものであり、ソレ系の代名詞は、話し手、

書き手が、それを「読み手、聞き手を中心とする円周内に含まれるもの」として考えて表現するものである。したがって、コレ系の圧倒的に多い巻一は、巻二、三より主観的な文章であると言える。逆に言えば、巻二、三の方がより客観性を帯びているという事であり、この結果は、係助詞「ぞ」「なむ」の考察によって得られた「巻二、三がより説明的である」という結果とも矛盾するものではない。以上のように、指示代名詞の考察によっても、巻一と巻二、三に文体的相違を認めねばならない。

### 3. 和歌の用法

物語における和歌の使用のされ方は大きく二つに分類されよう。いわゆる贈答歌の類で誰か相手が在ってその人物と詠み交わす和歌と、自分の(登場人物の)想いを、独りで和歌に詠みあげたもの、いわゆる独詠歌である。

『松浦官物語』においては、右で言う贈答歌の類に、巻一と巻二、三では特徴的な違いが見られる。表四を見れば解るように、巻二、巻三では会話の一部として登場する歌が多い。巻一ではほとんど見られなかった和歌の使われ方である。しかも、巻一に見える一例も華陽公主が昇天して行く琴に呼びかけた言葉の中に詠まれた和歌で、純粋な会話文のそれとは言い難い。

元来、自分の想いを相手に伝えるという点において、会話文も贈答歌もその働きに違いはない。しかし、和歌をそ

< 表 四 >

|     | 独詠歌  | 贈答歌<br>の類 | 贈答歌の類のうち<br>会話中のもの |
|-----|------|-----------|--------------------|
| 巻 1 | 13 首 | 21 首      | 1 首 (2.9%)         |
| 巻 2 | 6 首  | 11 首      | 7 首 (41%)          |
| 巻 3 | 7 首  | 13 首      | 7 首 (35%)          |

※ ( ) 内の%は贈答歌の類に占める割合

の思いを三十一文字の定型詞にまとめる事で、より簡潔にストレートに相手に想いを伝えるものである。『松浦宮物語』の巻二、三が、くだけたしさを免れないのは、一つには、この和歌の贈答による簡潔な意志表示が少ないせいだと言えよう。

また、和歌が会話文に取り込まれた形で表現されるといふことは、文章における、あるいは物語における和歌そのものの独立性が薄いという事である。この見方でゆくと『松浦宮物語』は、巻一においては和歌の独立性が高いが、巻二、三においては低い、という事になる。これを、作者の創作意識に反映させて考えると、巻一は歌物語的な意識が

強く、巻二、三では散文物語的意識が強いと解釈できよう。そして、この事は、散文の量的には巻二が多く、次に巻一巻三の順であるのに、和歌の数は、巻一―三四首、巻二―一七首、巻三―二〇首と圧倒的に巻一に多いという事とも一致する。

これらの考察が妥当である事は、巻一における弁少将と神奈備皇女の恋愛プロットと、巻二における弁少将と鄧皇后の恋愛プロットとを比較してみれば良く解る。前者が、歌の贈答というせい肉のない文章で互いの気持ちが綴られて行くのに対し、後者は、和歌を交えた長々しい会話によって語られてゆくのである。

この様に、和歌の用法、あるいは物語における和歌の位置といった視点からも、巻一と巻二、三の間に相違を認めらる。

#### 4. 形容詞のウ音便現象

形容詞連用形のウ音便化の調査は、文章、語法の特徴を調べる際によく用いる方法である。『松浦宮物語』における形容詞ウ音便化の調査結果は表五の通りである。

この表を見る限り、巻一と巻二、三における相違はないしかし、だからといって、この結果が即、『松浦宮物語』の巻二、三加筆の可能性を否定するとは言えないだろう。

なぜなら、この調査に使用したテキストは角川文庫であるが、これはその底本を、<sup>注五</sup>「伝後光厳院宸翰本」という写本によっており、したがって、この写本の段階でウ音便化し

< 表 五 >

|           | 卷一  | 卷二  | 卷三  |
|-----------|-----|-----|-----|
| 音便化した用例数  | 33  | 38  | 33  |
| 音便化しない用例数 | 96  | 102 | 64  |
| 音便化した割合   | 26% | 27% | 34% |

たものとうそでないものとの混乱も考えられるからである。すでにとりあげた係助詞「ぞ」「なむ」の場合は「ぞ」「なむ」の間に写本の段階での混乱は考え難いが、音便現象の場合、意味上の相違を全く伴わないだけに、より写本時に通用している形の方に、あるいは写筆者が通常用いる形の方に誤写され易いと考えられる。

以上四点の文体分析のうち、第四点のウ音便現象を除いては、巻一と巻二、三の間に文体的相違の在る事を示しており、ゆえにこの文体的な観点からも『松浦宮物語』の巻二、三の加筆は肯定できよう。

## 結 び

『松浦宮物語』の作者を定めるに最も有力な定家作者説を再考してみると、その骨子とも言うべき『無名草子』の記述は、正しくは巻一の作者を定家と決定するにとどまり、同時に、巻二、三の加筆の可能性を高めることとなった。さらに、その可能性を実証する為に『松浦宮物語』に文体分析を試みた。それによれば、巻一と巻二、三には文体的相違が数值的にも現われ、巻二、三が巻一より説明的・客観的な文体であり、また、巻一の方が和歌の独立性が高く、歌物語的要素が強いと判断できた。

以上の様な考察から、現存する『松浦宮物語』は、巻一のみが従来の説の通り定家の作であり、巻二、三は後の他者による加筆であると考えられる。

注一・水野治久氏「松浦宮物語の成立年代と作者について」

(国語と国文学昭和十五年六月)

注二・萩谷朴氏 角川文庫「松浦宮物語」

注三・辛嶋稔子氏「伊勢物語三元成立の論」(伊勢物語

総索引・大野晋、辛嶋稔子編 明治書院)

注四・注三に同じ

注五・角川文庫「松浦宮物語」は、岩波文庫を訂正して

得られた蜂須賀本原型によるが、岩波文庫は、蜂須賀家所蔵の伝後光厳院宸翰本を忠実に複製したもの

(三十二回生)